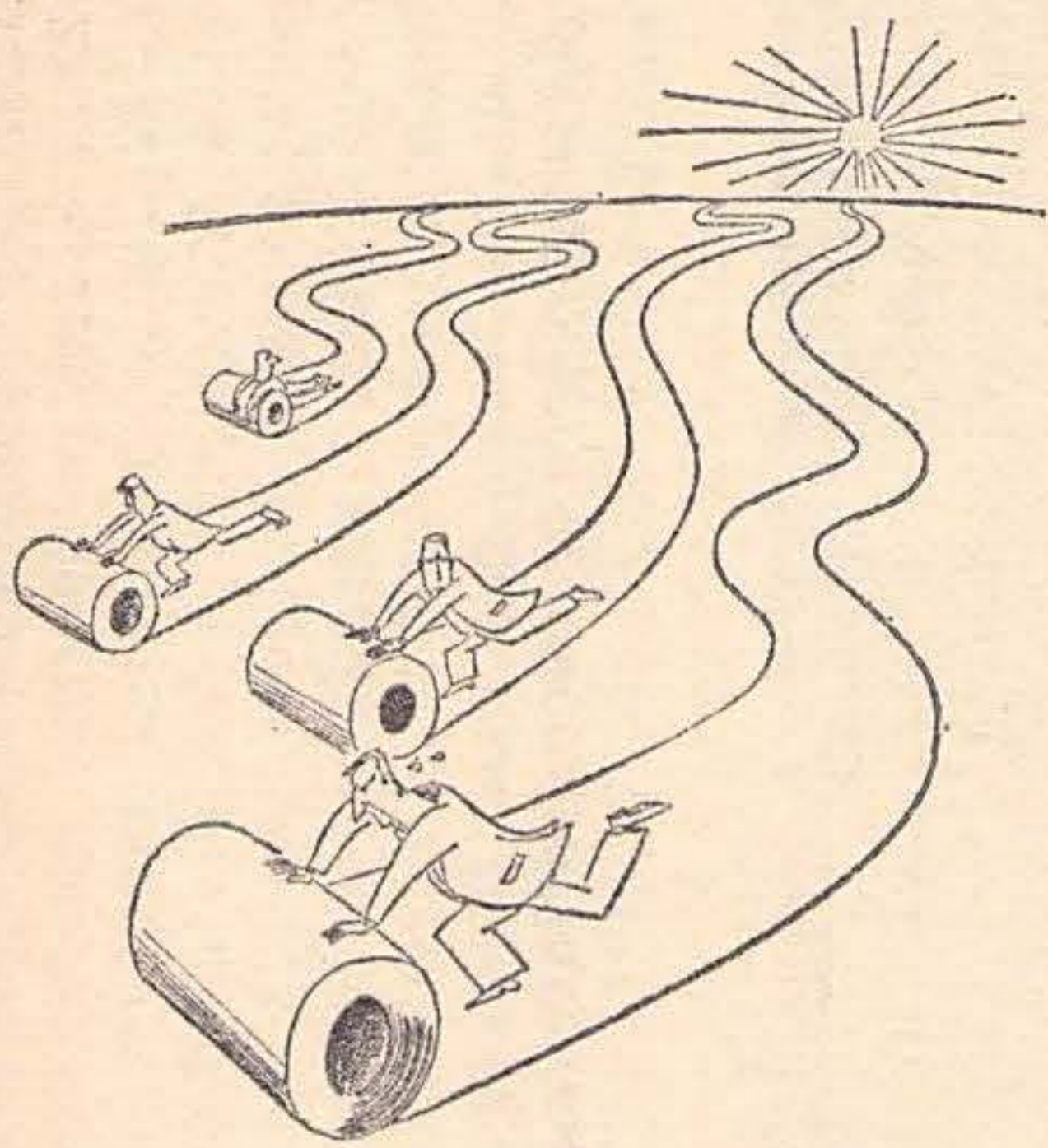


# 番当癡ち

クロイワ・カズ



77 念 我 禁

不毛な嵐の競争より真の戦いを!

「既定方針」との六文字の「スローガン」を「毛主席語録」として『人民日報』をはじめあらゆるメディアに掲載しはじめ、江青・主席(党)、張春橋・総理(國務院)、王洪文・委員長(全人代)の人事を毛沢東が言い残した「既定方針」(委)とすべく、先制的なプレス・キャンペーンを一言に開始したのである。以後、「既定方針」とおりの「スローガン」は、十月四日まで『人民日報』に頻出し、多い日には一日の紙面に三十回もこのスローガンが出るという異常さであった。十月四日の『光明日報』トップには、いまや悪名高い「四人組」の共通ペンネームとなつた張勁若名の論文「永遠に既定方針どおりやる」が出ていた。これらからして、十月四日の紙面を編集した十月三日までは「四人組」が党中央をコントロールしていたも

が幻か、と思われべきドラマがほほ台湾におりに現実化という意味でも衝撃的であった北京政変から一月半が過ぎた。この間、政変にいたる経緯の輪郭は徐々に明らかになってきた。同時に江青夫人ら「四人組」にたいする非難・攻撃のありさまは、日を追って激しくかつ具体的になってきており、一方、華国録にたいする礼讃が日増しに著しくなってきた。私がすでに別のところでも述べたように、九月九日の毛沢東の死に直向した「四人組」は、去る四月の天安門事件以後、党中央において毛沢東側近の家長体制から離反してゆく文革派幹部の存在に気づいていたがゆえに、ただならぬ危機意識にとらわれ、毛沢東の葬儀の二日前(九月十六日)から「既定方針どおりやる」(按既定方

# 北京政変後の中国

## 波乱含みの脆弱な華国録制

中 嶋 嶺 雄



が先に手を下すか、といった状況のなかで過熱化していったと思われ。それだけに不可侵であるべき服喪期間(それは休戦時間でもある)をめぐっても一致せず、結局は隠も明けないうちにあのような事態になったのだが、すでにこの段階でこれまで毛沢東王朝を警護してきた汪東興率いる首都衛戍区八三四一部隊、倪志福率いる首都工人民兵といった「親衛隊」も「手兵」もいまや叛いたことになり、気づいた彼らは、おそく十月五日、六日という時点で、最後のよ

「あなたかやれば、私は安心だ(你辦事我放心)」と書いた(同翌三未要)の原則を中央政治局会

て、この日のうちに華国録が権力を掌握したことを明らかにしている。まさに、毛沢東の言葉どおり、「政権は銃口から生まれる」のだといえよう。そして、華国録指導部は、「四人組」が叫んだスローガン「既定方針どおりやる」は、「過去の方法どおりやる」(按過去方法)という本来の毛沢東の言葉を三文字改竄したものだといはじめ、実際的には去る四月三日日に毛沢東は華国録にたいし「あなたがやれば、私は安心だ(你辦事我放心)」と書いた(同翌三未要)の原則を中央政治局会

の距離はすでに遠いものとなって

かもしれない。

るべとして、毛遠新(毛沢東の共同社説)のたと主張して、以(契)が政治委員をつとめる衛防部隊の急派を要請したのだが、それも失敗し、汪東興率いる中央警衛処のボディ・ガードによってつねに動静をキョウチされてきた彼らは、十月七日、まさに「予防ク一データ」を見舞われて一網打尽にされたものと思われる。『人民日報』「紅旗」「解放軍報」の共同社説「偉大な歴史的勝利」は、「党中央は、一九七六年十月七日、華国録同志の中国共産党中央委員会主席、中国共産党中央軍事委員会主席就任について決議をくだした」と述べており、まさに「四人組」逮捕(もしくは殺害?)という代償によってはじめ

「君たちは注意すべきだ。四人の小派閥にかたままってしまっている。これら

の暴露のすべてを信するわけにはゆかないにしても、そこには、最近、周恩来未亡人・鄧穎超女史が全人代常務委員になったことも含めて、毛・江夫妻と周・鄧夫妻の夫婦関係、人間関係の壮絶かつ痛切な対比がある。そして、中南海の内部において、毛沢東の居室のすぐ隣には、毛王朝の警護役・汪東興が住んでいたことからしても、江青と毛沢東のベッドとの距離はすでに遠いものとなって

かもしれない。

### 謹賀新年

あけましておめでとうございます。昨年中はいろいろお世話になりました。本紙は、今年で創刊十一年を迎えました。本来の目的であるマスコミの偏向是正と正しい内外情勢の解説にいよいよ力を注ぎたいと決意を新たにしています。読者のみなさんの変らざるご指導、ご鞭撻をたまわりたく、お願ひ申しあげます。昭和五十二年元旦

### 言論人懇話会

「四人組」は彼女の「お色気」に送りこんだ「紅色女郎」たとおよお龍岡で形成されてきたサロンであっただけに、毛沢東も江青を疑い、三人の男との関係を疑っていたときえ思われる。一方、毛沢東の方は、こころ、二年、中南海の奥深く、つねに身辺には先

の張玉鳳をはじめ何人かの若い女性が付き添っていた。外務次官でもトランプ一台分も運びこみ、毎晩兼秘書・唐聞生については一般にもよく知られているが、こうして帝王はこれら女官に十重二十重に囲まれていたのである。彼女たちは一種の回春剤の役割りを果たしていたものとも思われるが、この防衛ベッドに寝ては、山崩れ、地裂くとも、視(み)るな江青女史をさらに寛立させたであらう。

私の右の挿写は、そのすべてが真実でないとしても、中南海の毛王朝の一つの雰囲気、中国側の材料によって再構成しただけにすぎない。

それにしても、最近の江青女史にたいする非難の言葉はあまりにも激しい。十二月五日付『人民日報』はついに彼女を国民党が延要